

●環境思想部会●

◆開催趣意： 「近代の功罪」の切り分けは可能なのか？
—— 〈脱近代〉の思想構築に向けて——

資本主義の社会経済体制の限界が指摘され、近代経済学者自らもその終焉を口に始めた 21 世紀初頭の現在、新たな社会理論の核となる〈脱近代〉の思想構築の必要性がより広く、より強く認識されるようになってきた。その方法論として有力なのは、「近代の功罪」を切り分け、その良質な部分を継承・発展させていくことである。と同時に、近代が否定してきた前近代の良質な部分にも光を当て、両者を結合させることによって近代を乗り越える思想、すなわち、〈両面乗り越え論〉を構築しようとする試みが〈脱近代〉の思想構築の方向性として探求されてきた。しかし、そうした考え方には疑問の声が上がっている。

例えば、「近代の功罪」という場合、民主主義（デモクラシー）をその「功」に、資本主義（キャピタリズム）を「罪」として位置付ける論者は少なくないだろう。すなわち、それは、〈脱近代〉の思想を構築する場合、社会政治体制としての民主主義は継承・発展させるべきであり、社会経済体制としての資本主義は別のものに置き換えるか、少なくとも根本的な改良を施したうえで継承・発展させるべきである、とする考え方である。

しかしながら、近代の民主主義は、「キャピタリスト・デモクラシー」（千葉 2000）とも呼ばれ、資本主義の発展が民主主義を促進し、民主化の広がりが資本主義の展開を促す、という密接な相互関係にあり、各々が相互に他方を前提としている点において、両者は不可分のものであり、それらを切り分けることは〈脱近代〉の思想構築の試みが机上の空論に終わる可能性を示唆していると考えられる。

そして、こうした危険性は、特に、〈両面乗り越え論〉の試みにおいて顕著となる。なぜならば、近代が前近代の否定の上に成り立つとすれば、両者の良質な部分は相互には相容れないものとして理解されるはずだからである。また仮にそのような性格のものを結合させるのであれば、それは一足飛びになされるべきではなく、少なくともそこに、いくつかの媒介項は想定されるべきであろう。

このように考えた時、これまでの〈脱近代〉の思想構築の試みを改めて見直す必要が強く認識される。と同時に、仮に、「近代の功罪」の切り分けが不可能と判断され、〈両面乗り越え論〉が空疎なものでしかない、となった場合、一体どうやって〈脱近代〉の思想構築を成し遂げるのか、提題者には皆目見当もつかない。それ故、今回の試みは、単に、参加者の研究上の立場の正否を争うのではなく、「近代の功罪」の切り分けや〈両面乗り越え論〉の権能と限界を見極める作業を通じて、共に〈脱近代〉の思想構築の方向性を考える機会としたい。（文責：穴見慎一）

〔参考〕千葉真（2000）『思考のフロンティア——デモクラシーdemocracy』岩波書店